

B 指導内容・方法

1. 難聴児の指導について

(1) 聴覚管理や補聴器の調整

① 設備・備品（選択回答、複数回答可）

全回答 1,154 のうち、回答数を列举すると、オーディオメータ 480、騒音計 296、音場聴力検査装置 146、補聴器特性検査装置 90 であった。

② 聴覚管理や補聴器の調整について（選択回答、複数回答可）

まず、聴覚管理や補聴器の調整をだれが行っているかについて以下に回答数を列举した。

・専門家に依頼	391
・保護者に任せている	298
・教室で行っている	194
・補聴器会社に依頼している	139
・その他	17

専門家の内訳は、「医療機関」284、「聾学校」163、「療育機関」83、「大学・研究所等」35 であった。医療機関のみならず、聾学校との連携も行われていることが明らかになった。

次に、「教室で行っている」内容の内訳を以下に列举した。

・聴力検査	194
・音場における聴力検査	104
・補聴器の特性検査	54
・補聴器のフィッティング	52

このことから、聴力検査までは学級・教室で実施しているものの、補聴器に関することは教室以外の専門家に依頼している状況と推察される。

(2) 指導上重視していることがら（自由記述）

言語障害の学級や教室であっても、実際に難聴児を受け入れている場合は、分析の対象とした。以下のカテゴリに分類し、考察した。

① 難聴児と難聴児を取り巻く人々とのコミュニケーション

- ・難聴児におけるコミュニケーション意欲の向上
- ・コミュニケーション能力の育成
- ・健聴児と意欲的にコミュニケーションがとれるための指導
- ・コミュニケーションを大切にし、小さなことでも伝わった、伝えたい、わかったという感情や思いの交流に心がけている。
- ・「聞く」「確かめる」「理解してもらえよう話す、伝える」

ここでは、難聴児本人に対して、どのように自分の考えを伝えるか、コミュニケーションの相手の話をどのように受け止めるかの指導を行っているという記述が多く見られた。

② 心理面における援助

- ・難聴児の心理的不安をなくすこと
- ・心身をリラックスさせる。
- ・不安やストレスを取り除くことや、和らげることなど、心理面のサポート
- ・難聴である自分を否定的に捉えないようなかかわりをしたいと考えている。

通級指導教室（難聴）に通ってくる難聴児の多くは、通常の学級に在籍している。そこでの情報の不足などに起因されるストレスを、通級指導教室で担当の教師と関わることによって解消させている様子が窺える。また、担当の教師としてもどのようにフォローしているのかがわかるような記述が見られた。

③通常の学級との連携

- ・通常学級の担任との連携を密にし、聴覚障害に関する情報を常に流すようにしている。
- ・個々の子どもの見方を通常の学級の担任と協議する機会を設けている。

前述のとおり、多くの難聴児が通常の学級に在籍するため、通級指導教室、一部では難聴学級の担当教師が通常の学級の担任との協議を多く持っていることの記述が見られた。

④ことば（特にことばの意味、使い方）の獲得についての援助

- ・語句の意味について理解しているかどうかを確認する。
- ・作文で正しい助詞の使い方が出来るようになること
- ・日常生活で使われることば中心に獲得させ、言葉によるコミュニケーションができるようにさせたい。

以前は、発音・発語の指導に関する記述が多く見られたが、今回は発音・発語よりもことばの意味についての理解をどう援助していくかの記述が多く見られた。このことは、コミュニケーションにおいて、発音・発語の明瞭さよりも、相手にどうわかりやすく伝えるかを重視した指導をしている結果であると思われる。

⑤きこえ・きこえの管理

- ・音のききとりを集中してできること
- ・聴覚の管理及び残存聴力の活用

これは、聴覚に障害があるということで必ず重要視される事柄であるが、以前と比べて今回は記述が少ないようであった。

⑥障害認識

- ・子どもが「障害のある自分」を適切に認識し、主体的に自分らしい生き方ができるように指導していきたい。
- ・自己の障害を認識し、困難さに立ち向かう自信と意欲を育てる。
- ・自分の障害を認識し、自分なりの目標をたてる力を身につけさせたい。

障害認識について、以前はあまり記述が見られなかったが今回は多く見られた。ここに通級指導教室及び難聴学級における新たな役割として障害認識に関する事項が出てきたように思われる。

その他、補聴器の管理、個別指導、学力、難聴児への支援、聾学校との連携、自立活動発音・発語指導、聴覚障害の理解、軽度・中等度難聴児の指導、保護者援助に関する記述が見られた。

(3)指導上の課題となっていることがら（自由記述）

①コミュニケーション

- ・難聴児とのコミュニケーションの取り方が難しい。
- ・生活言語が少ないため、コミュニケーションができない。
- ・友達、担任外の教師とのコミュニケーションができない。
- ・コミュニケーションマナーが育たない。

これは単にコミュニケーションができないというばかりでなく、相手の話を受け止める、それに応じて話すというコミュニケーションの仕方まで言及している記述が多く見られた。

②指導時間

- ・週1回～2回の時間しかとれず、定着、成長がなかなかみられない。
- ・指導時間数不足から教科などの補助指導が不十分
- ・難聴学級では通常学級と同じ時間割の中で授業をするため、「自立活動」の時間を設定することが難しい。
- ・島しょのため、交通機関の確保が難しく指導時間、回数が少なくなりがちである。

ここでは、通級指導教室においては、在籍している通常の学級の時間数及び行事などの状況で時間の調整に苦慮している記述が見られた。また、上述の記入例に見られるように、離島など教室または学級とかなり離れている場合、行き帰りの時間にとられてしまい、指導時間が少なくなってしまう記述も多く見られた。さらには、つきそいの保護者との時間調整に苦慮している記述も見られた。

③指導者の専門性・研修

- ・担当教諭及び校内で経験者がいないため、研修などが必要である。
- ・1人担任のため、研修に出られない。
- ・指導経験が少なく障害の持つ特性を理解するのに時間がかかる。
- ・デジタル補聴器などコンピュータ調整になり、指導者が対応できない。

ここでは、難聴学級の担任が1人であることや、代替の教員がいないことなどの理由で研修を受ける機会がなく、専門性を身につけることができないという記述が目立った。また、日進月歩である補聴器の対応についても、あまりの進歩の速さについていけないという記述も出された。

その他においては、前項の重視していることがらにも見られたが、発音・発語、心理面、言葉・語彙、補聴器、学習環境、難聴児の支援体制、通級の体制、指導体制、他校難聴学級との交流、教科指導、保護者援助、通常学級担任との連携、進路指導に関する記述が散見された。これらからは、重視していることがらがそのまま課題となっていることが窺える。また、少数ではあるが、通級指導教室または難聴学級における総合的な学習の時間に関する記述もみられ、早くも新しい教育課程における課題が提起された印象を受けた。

2. 言語障害児の指導について

自由記述であるため前回調査との客観的な傾向比較は困難であるが、今回の回答の内容において特筆すべき新たな事項は見られなかった。以下に回答の傾向及び記述内容について報告する。

(1)指導上重視していることがらについて（自由記述）

この質問には、言語障害学級及び言語障害通級指導教室からの回答の約95%に何らかの記述がなされていた。したがって、調査に協力した学級・教室のほとんどがこの質問に回答していると考えてよいことになる。

回答には、重視していることがらが1点のみ記述されているもの、複数記述されているもの、ある障害種（例えば、構音障害）に関して記述していると考えられるもの、どのような子どもにも共通して重視していることがらを記述していると考えられるもの、などが

見られた。また、指導方法、関わり方等のかなり具体的なことがら（例えば、自分の発音をしっかりと聴かせる、舌の運動、等）が記述されている回答もあれば、指導方針、ねらい等のかなり大まかなことがら（例えば、短期間での改善、自分自身を好きになること、等）が記述されている回答もあり、記述内容の具体性にかなりの幅が見られた。

以上に回答の記述様式についての概観を述べたが、記述内容に関しては以下にいくつかの柱に分類・整理して列挙する。なお、回答は内容の重複を避けつつ、かつ、文意が損なわれない範囲で文言を整理してある。

①指導を的確に行うこと、スムーズに行うことを重視した記述

- ・ 日常の観察、諸検査などにより客観的資料を蓄積し児童の実態を正しく把握すること
- ・ 多側面から子どもの状況を把握し的確な見立てを行い指導すること
- ・ 障害の背景となる様々な諸要因を把握すること
- ・ 個々の子どもの指導計画を立案し、適した指導を行うこと
- ・ 意欲的に学習に取り組めるよう教材教具を工夫すること
- ・ 子どもが飽きないように遊びなどを取り入れて指導すること
- ・ 言語を使うこと、話すことの楽しさを感じさせるようにすること

②障害の状態の改善や、能力の向上を重視した記述

- ・ ことばの問題の軽減・改善を図ること
- ・ 語彙の拡充、文法力、文章力、表現力の向上を図ること
- ・ 言語発達を促すため、自然な会話、やりとりを重視している
- ・ 生きたことばとなるよう、できるかぎり実際の生活場면을指導に取り入れること
- ・ 正しい音の弁別、舌の機能訓練、構音法の習得
- ・ 正しい発音を日常生活の中で使っていけるように積み重ねの指導を大切にしている
- ・ 全体的な運動機能を高めること
- ・ 苦手な音、場面に対する緊張を解くこと、苦手意識を解消すること
- ・ 発話のなめらかさを促すこと

③障害認識・自己認識を重視した記述

- ・ 自己の障害との向き合い方を支援すること
- ・ マイナスイメージを持たせないようにすること
- ・ 子どもが自分自身を好きでいられるようにすること、自己肯定観を持たせること
- ・ 自己を理解していくことを支援すること

④子どもの全体像、心、個性、暮らしを大切にすることを重視した記述

- ・ 子どもの暮らし全体を支えること
- ・ 子どものパーソナリティを大切にすること
- ・ 子どものよいところを見て、伸ばすこと
- ・ その子なりの姿を認め支援すること
- ・ 障害があっても自信をもって話すこと、暮らすこと
- ・ 言語の状態のみを見るのではなく、全体発達に配慮すること

⑤子どもとの関係を重視した記述

- ・ ことばの教室は楽しいところと思われるようラポートづくりを重視する
- ・ 子どもと気持ちのやりとりができるようになること

- ・ことばの教室や担当者を好きになり、安心して通えること
- ・子どもとの人間関係を深めること
- ・子どもの内面や担当者自身の内面を見つめること、振り返ること

⑥子どもと周囲との関わりやコミュニケーションを重視した記述

- ・学級集団生活で適応していけるよう社会性を身につけること
- ・子どもを取り巻く周囲の人との関わり合いを広げ深めること
- ・言語環境を豊かにすること

⑦周囲との連携、周囲への支援を重視した記述

- ・保護者の気持ちを受け止めるようにすること
- ・子どもの障害、状態について保護者の理解を促すこと
- ・保護者同士をつないだり、保護者の子育てに関する支援を行うこと
- ・学級担任との情報交換を行うこと、連携を図り深めること
- ・在籍学級の子どもたちに理解を促すこと
- ・医療機関や福祉機関等、関連機関との連携を図ること

以上のとおり、指導上重視していることがらを類別・列挙した。記述内容は、子どもの障害状況、教室をとりまく地域の状況、文化、風土、担当者の研修歴やおかれた状況等にも影響されていると思われるが、これらの記述には教室担当者の教育観、障害観、言語（指導）観などが少なからず反映されていると考えられる。

(2)指導上課題となっていることがらについて（自由記述）

この質問には、言語障害学級及び言語障害通級指導教室からの回答の約 90%に記述が見られた。自由記述により得られた回答を以下に整理・分類して列挙する。

①子どもへの指導に関する記述

- ・実態把握や評価の仕方
- ・ニーズをいかに把握するか
- ・舌の機能訓練や構音の改善方法
- ・吃音の子どもへの対応、指導の仕方
- ・ことばの力を伸ばすための指導方法
- ・長期指導しているが成果が上がらない
- ・この指導でよいかどうかが不安
- ・どのように子どもと関係を作ったらよいか
- ・どのように自信を持たせ、生き生きとさせるか
- ・終了のめやす、判断
- ・その子に合った教材の工夫
- ・社会性を育てたいが個別の場でどのようにできるか
- ・ことばの教室でできたことの日常場面への般化

②子どもへの直接的指導以外に必要な様々な取り組みに関する記述

- ・指導記録の書き方
- ・周囲への理解啓発
- ・指導内容の保護者や学級担任への説明
- ・子どもの実態に関する情報収集が個人情報保護との関係で難しい

- ・保護者、親の会、在籍学級、関係機関との連携・協力

③子どもの受け入れ体制、指導体制等に関する記述

- ・障害の多様な子どもが増加し、対応が困難
- ・指導時間の確保、やりくりに工面している
- ・午後から放課後に通級希望が集中する
- ・ニーズがあるのに家庭事情で通級できない
- ・遠方からの通級で子どもが疲れていて指導に影響する

④人事・研修・制度に関連した記述

- ・校内業務との兼ね合いで指導に専念できない
- ・専門的知識、技術が不足している
- ・数年で異動となり、指導上十分な専門性が身に付かない
- ・一人で担当しているため、ケース会議や話し合いが持てない
- ・研修したいが機会に恵まれない

⑤設備・備品等、教室環境の不十分さに関する記述

- ・プレイルームが手狭
- ・指導室が不足している
- ・部屋の構造がよくない
- ・必要な検査器具、遊具、教材がない（買えない）

以上に「指導上課題となっていることがら」について整理したが、回答のあった学級・教室の半数以上は、子どもへの指導に関することがらを記述していた。そこには(1)の「重視していることがら」と共通する記述もかなり見られた。「重視していることがら」の不十分さがそのまま「課題となっていることがら」として記述されたということもできる。また、制度や経営上のこともかなり挙げられている。指導に関する課題は、制度や経営上の課題と完全には切り離せないということでもあるだろう。全体としてみると、担当者自身が情報を得たり、研修を積んだり、工夫したりして解決に向かう課題と、周囲への働きかけや、理解、協力なくしては解決が困難と思われる課題とに大別できるようである。

3. 「その他」の子どもの指導について

(1) 「その他」の子どもの障害状況について（自由記述）

指導している難聴あるいは言語障害以外の子どもの障害状況をきいた設問である。有効回答 1,154 件のうち、調査項目 A-3「その他」に記入がある回答は 688 件である。そのうち、この設問に対して回答しているのは 341 件の約半数であった。ちなみに調査項目 A-3 から得られた「その他」の子どもの数は、難聴・言語学級及び通級指導教室で指導されている子どもの全数 25,693 名のうちの 1,986 人であり、全体に占める割合は 7.7%であった。

なお、調査項目 A-3「その他」に記入がないにもかかわらず、この設問で記述が見られる回答があった。これらは「その他」を「それ以外」と混同している可能性があるため、分析は、A-3 の「その他」に記入があり、この設問に記入があったものだけを対象とした。

この回答中、障害名として多く回答されているものには以下のものがあつた。

- ・知的障害
- ・自閉症
- ・LD（学習障害）
- ・ADHD（注意欠陥/多動性障害）
- ・場面緘黙
- ・脳性麻痺
- ・高機能自閉症
- ・ダウン症候群
- ・広汎性発達障害

前回調査には登場していなかった ADHD の子どもの指導が行われている。

この他に障害名だけではなく、指導対象とする児童・生徒の状態を記述したものが多く挙げられている。回答の多い内容は、「コミュニケーションが難しい子ども」「集団不適応」「学習障害と考えられる子ども」「落ち着きのない子ども」「情緒的に不安定な子ども」「学習が苦手な子ども」「不登校」などであった。この他にも数は少ないが、外国籍の児童や帰国児童生徒の日本語の指導などが複数回答されている。

ここで記入された障害名や児童の状態はまさに多様であり、現在の難聴・言語学級及び通級指導教室では、様々な障害や困難のある児童を指導している実態にあることがわかる。

(2)「その他」の子どもの指導上の課題（自由記述）

回答は以下の 5 種類に整理できた。

①指導の内容・方法 子どもに適した指導をどうすべきかなど、言語障害や聴覚障害以外の子どもへの指導を、研修を受けない状態で行っていることに対しての悩みや、学級や教室での指導効果がでても、通常の学級などに戻ってしまうとその効果が反映されないことや、個々の子どもに適した教材の準備の難しさが課題として語られている。

②指導体制 「その他」に含まれる幼児児童生徒の数が増えてきている現状に、今の体制では教員が能力的、時間的な理由から対応しきれないことや、子どもに適した指導頻度を取ることが難しい現状が課題とされている。

③指導のための取り組み 集団への適応が難しい子どもや、高機能自閉症の子どもに対して小集団で社会性などの学習を行うことが必要だが、他に似かよった状態の子どもがいないために難しいことなど、行うべき取り組みを行えない問題を課題としている。

④関係者との連携・協力 家庭での対応が重要な子どもや、学級での対応が必要な子どもと担当者が考えている場合でも、保護者や学級担任との連絡がうまくいかず、指導の効果があがらないことなどが課題とされている。

⑤教師の専門性・研修 子どもの見立て方がよくわからないということや、「その他」の子どもに関する研修体制がなく専門性を身につけにくいこと等の課題が述べられている。

ここで最も多く回答された課題は、①指導の内容・方法についてである。②から⑤の課題はそれに比べると少数である。

子どもたちの多様な障害の状態に対して、教員の専門性や学級・教室の体制が対応しきれしていない現状を訴えた課題が多い。

4. 指導形態など

(1)指導形態（選択回答）

以下の選択肢によって回答を求めた。

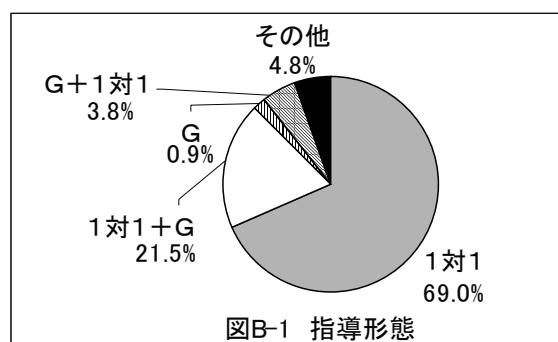
a: ほとんど 1 対 1 の指導である（図中「1 対 1」）。

b: 1 対 1 の指導を中心とし、小グループを併用している（図中「1 対 1 + G」）

c: ほとんど小グループによる指導である（図中「G」）

d: 小グループによる指導を中心とし、1 対 1 の指導を併用している（図中「G + 1 対 1」）

e: その他



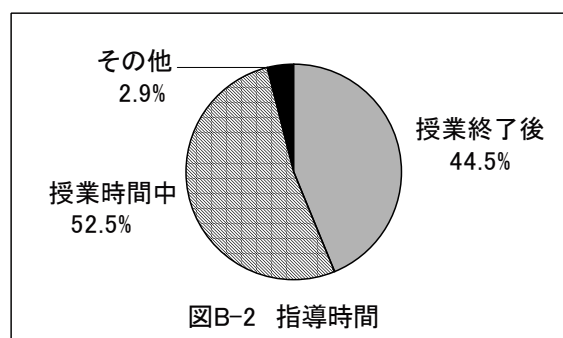
図B-1 指導形態

この設問への回答は 790 件あった。回答を整理した結果を図 B-1 に示した。全体の約 9 割が 1 対 1 の指導を中心としていることが明らかになった。一方、何らかの形で小グループ指導を行っている学級・教室が 26.2%あることがわかった。

(2) 指導時間

以下の条件にあてはまる指導対象児の人数の記入を求めた。

- a:主に、通常の学級等の授業終了後である子ども（図中「授業終了後」）
- b:主に、通常の学級等の授業時間中のいずれかである子ども（図中「授業時間中」）
- c:その他



この設問に記入された対象児の人数は合計 15,357 人であった。回答を整理した結果を図 B-2 に示した。全体の 5 割強の子どもが授業時間中に指導を受けているが、授業終了後に指導を受けている子どもも 4 割以上いることがわかった。

5. 個別の指導計画

(1) 指導計画の項目について(自由記述)

前回の調査結果では、無回答・決まった書式がないという回答が約 23%あった。今回は決まった書式がない・計画を立てていないという回答は全体の約 2%であり、無回答を含めても全体の約 4%であった。前回と比べて個別の指導計画を立案することは急速に広まったと思われる。代表的な項目は、①児童について、②指導の方針、③指導目標、④指導の内容と方法、⑤評価・反省、⑥その他、に分けられた。各項目の詳細について以下に列举する。

- ①**児童の実態**；児童名、性別、生年月日、在籍学校名、学年組、担任名、保護者名、住所、電話番号、障害名、障害状況、主訴、家族構成、家庭環境、生育歴、入級年月日、諸検査や観察の結果等
- ②**指導方針**；保護者のニーズ（願い）、本人のニーズ（願い）、学級担任のニーズ（願い）、学級での様子、家庭での様子、身体障害者手帳の等級、関係機関からの情報、問題の仮説、指導の仮説、
- ③**指導目標**；年間の目標、年度の目標、学期の目標、長期の目標、短期の目標等
- ④**指導内容**；領域・教科、構音指導、聴能訓練、指導する音の順、コミュニケーション・言語、社会性・適応指導、音韻・構音指導、感覚訓練、教科補充、発音練習、聴覚学習、指導の留意点等
- ⑤**評価・反省**；学期毎の反省、計画の評価・修正、再評価等
- ⑥**その他**；特記事項、特別支援、保護者・在籍学級との連携等

今回の調査で添付された資料は 122 件であった。添付された資料の名称は、「個別指導計画」のほかに「教育計画」「通級指導計画」「個別指導年間計画」「学習指導計画」「年間指導計画」等であった。

子どもの実態を把握するにあたり保護者や学級担任に記入してもらうアンケート用紙や面接時に聞き落としなく、記入しやすいように項目が立てられた記録用紙が添付してある

ものもあった。また、「指導記録」の用紙に指導計画と実施（指導）記録が書けるようにしてあるもの、地域で共通の書式を使用しているもの、児童の実態整理表（プロフィール・フェースシート）とアセスメント（個人カルテ）と個別の年間指導計画表がセットのもの、言語・コミュニケーション、聴覚の実態を取り出しているものなど様々な様式の資料が添付されていた。以下に代表的な例を示す。

＜例１＞原寸はA3版

個別の指導計画 担当者（ 年 月 作成		長期目標	
氏名	小学校 年 組	通級指導室における 短期目標	評 価
障害の状況 オージオグラム	発音のようす 語彙・理解 聴覚活用 学習面	1 学期	
補聴器の状況 機種 調整	語検査の記録 WISC-R CA () ITPA CA () PLA () PVT CA () VA () その他	2 学期	
学校生活（行動・学習・友達関係など）	担任の要望	3 学期	
家庭生活（友達・家族・遊びなど）	保護者の願い	在籍学級との連携における配慮事項	評 価
本人の得意なこと・好きなこと 困っていること・がんばりたいこと		1 学期	
		2 学期	
		3 学期	

＜例２＞原寸はB4版

平成13年度 ことばの通級指導教室				個別の指導計画表			
氏 名	男 女	生年月日 年 月 日	平成 年 月 日	指導目標			
現 住 所	氏 名	続柄	電話	一 学 期	指 導 事 例	指 導 内 容	評 価
保 護 者	氏 名	続柄	電話				
在 籍 等	立 () 年保育 または 第 学年 担 任 名						
障害の状況		諸検査等		二 学 期	指 導 事 例	指 導 内 容	評 価
↓		保護者・本人の願い					
↓		指導方針・方法					
↑				三 学 期	指 導 事 例	指 導 内 容	評 価
生育歴（主な事例）	集団参加	興味・関心等	性格・運動等				

◎ 達成できた ○ ほぼ達成できた △ まだ支援が必要である

＜例3＞原寸はA4版

個別指導計画		初回	平成	年	月	日
児童氏名	男・女	生年月日	平成	年	月	日
保護者氏名	在籍校・学年・組	記入者	小学校	年	組	
住所	電話					
通級日	曜日	午前・午後	時	分	～	時
通級開始日	平成	年	月	日	()	
実 状 概 要	検査					
	初回面接時の様子					
	①家庭状況					
	②生育歴					
	③言語発達歴					
	④日常生活（生活・食事など）					
	⑤教育歴					
⑥医学的診断						
⑦その他						
保護者の願い						
学級担任の願い						
長期目標						

＜例4＞原寸はA4版

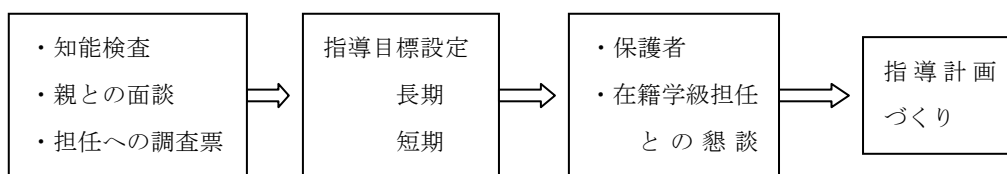
個別指導計画表		(継続)	
児童名	男	学校名	学年
主訴	女	生年月日	
家族構成及び 係わり方			
生育歴・教育歴	dB 125 250 500 1000 2000 4000 -10 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130		
聞こえの様子	周波数 (Hz)		
ことばの様子	検査日 () 平均聴力レベル (右 dB 左 dB) 障害者手帳 (種 級 番号) 補聴器装着耳 (右、左) 補聴器の種類 (通常耳掛け FM その他)		
コミュニケーションの様子			
本人の障害理解・受容	知的発達の様子	健康医療面の配慮	
その他			
通常学級の様子			
家庭での様子			
要 望	通常学級からの要望		
	家庭からの要望		

(2) 計画立案に至るまでの具体的な作業内容(自由記述)

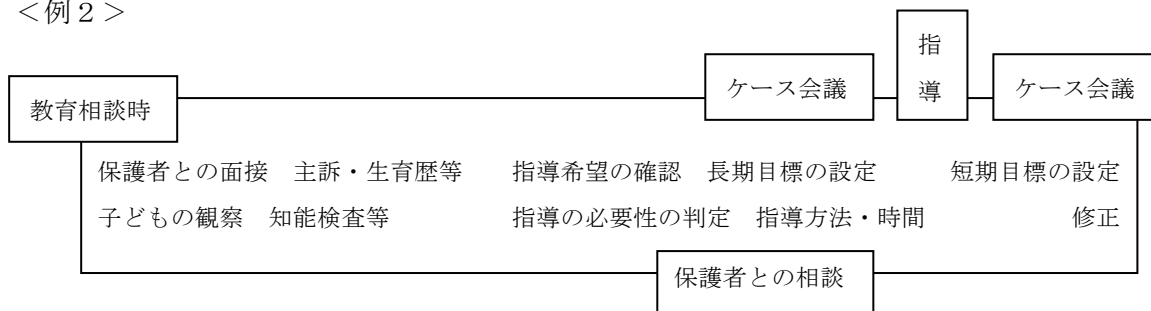
この項目について約8割の回答があった。「保護者との話し合い」や「学級担任との話し合い」「子どもの様子を見て」だけが記載されている回答もあったが、①子どもの実態把握、②保護者からの情報、③学級担任からの情報、④関係機関からの情報、⑤ケース会や協議等が指導計画を立案するために行われる作業であった。

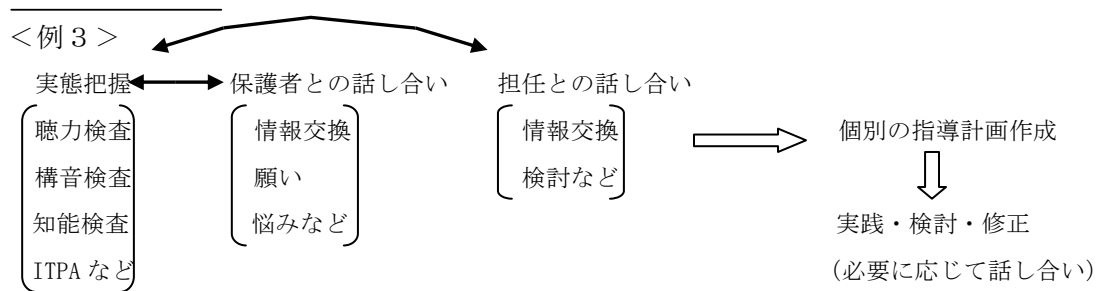
以下に、回答された中から図示された作業過程を例示する。

＜例1＞



＜例2＞





(3) 保護者の意見の反映方法(自由記述)

前回の調査結果では、無回答・反映させていないという回答が約 32%であったが、今回の調査では、無回答・反映させていないという回答は 27%であった。

反映させている方法としては、以下のようなものが挙げられる。

- ・面談・家庭訪問・授業参観・懇談会・連絡帳（日記）・電話
- ・個別指導計画に保護者のニーズ欄を設けている。
- ・調査カードで要望を記入・面談で確認
- ・保護者同室を原則としているのでその都度話し合い、反映させている。
- ・個別指導計画を保護者に見ていただき、感想、意見などを聞いています。

(4) 新学習指導要領による変化(自由記述)

前回は調査されていない項目である。無回答・変化無しと回答としたのは 87%であった。「変化した」と回答した具体的内容は、以下のように整理された。

①「指導内容・方法・考え方」の変化

この内容は、さらに子どもの「主体性」「コミュニケーション」「保護者の意向」「自立活動」「評価」というキーワードに分けられる。

「子どもの主体性」

- ・個々の子どもたちの発達を支援するかかわりと子どもの主体性・自主性を尊重し興味関心、課題意識を生かす活動内容をさらに重視するようになった。
- ・子どもの主体性を大切にし、指導目標を一致させるようにし、子どもが自ら課題解決にあたれるようにしている。

「コミュニケーション」

- ・小グループ指導を取り入れ、社会性やコミュニケーション面への配慮をより行うようになった。
- ・コミュニケーション、生きる力、情報教育、体験、地域の中で、などをより充実させるように考慮している。

「保護者の意向」

- ・保護者のニーズの重要性
- ・保護者の意向の確認と指導内容の説明を意識的に実施するようになった。

「自立活動」

- ・自立活動の 22 項目を参考にして課題の意味づけをするようになった。
- ・指導内容を養護・訓練的なものから自立活動的なものにしている。

「評価」

- ・目標が確かになった。長期にわたり大きくとらえたり、細かいステップを考えたりするようになった。
- ・月ごと、学期ごとの評価を重視

②「書式・形式」の変化

- ・形式に変わりがあったが、こちらの考え方にはあまり変化なし。
- ・県からの提出書類要項が大幅にかわって苦勞した。あまり変更の意味もなさそう。
- ・各担当者がそれぞれの指導目標をたてて指導にあたってきたが、共通の書式を使い、在籍校、家庭へも配布し、理解・協力を得るようにしている。
- ・指導方針や保護者のニーズ、話し合いの結果などを明文化し、記録として残すように心がけている。

③「総合的な学習」に関すること

- ・「聴覚的総合学習」として自立活動、国語、道徳などを総合的に学習できる計画を学期毎に実践している。
- ・特別にないが、「総合的な学習」の時間が自由自在に入ってくるため、「通級」という形が成立しなくなる場面も出てきて危機感を感じている。

④「連携・交流」に関すること

- ・学級の他の子どもたちとの交流を図れるような内容をできるだけ入れるようにした。
- ・総合的な学習を指導計画の中に取り入れ、在籍学級と連携をとりながら児童が学級の中で生き生きと生活できるような支援をするようになった。
- ・在籍校担任と計画案について懇談会をもつようになった。

⑤「その他」

- ・特にないが時間割編成が難しくなった（モジュール方式になった）。
- ・「自立活動」という表現がそぐわない感じがする。「養護・訓練」でよいのでは。
- ・TTの部分かふえ、子どもへの援助の幅が出てきた。
- ・QOLを高める支援が学校教育の中でもできるよう、教育課程、個別の指導計画の中に位置づけている。
- ・障害の認識について考えるようになった